

稻作

営

農

情

報

健苗移植と水管理の徹底で活着の促進を！

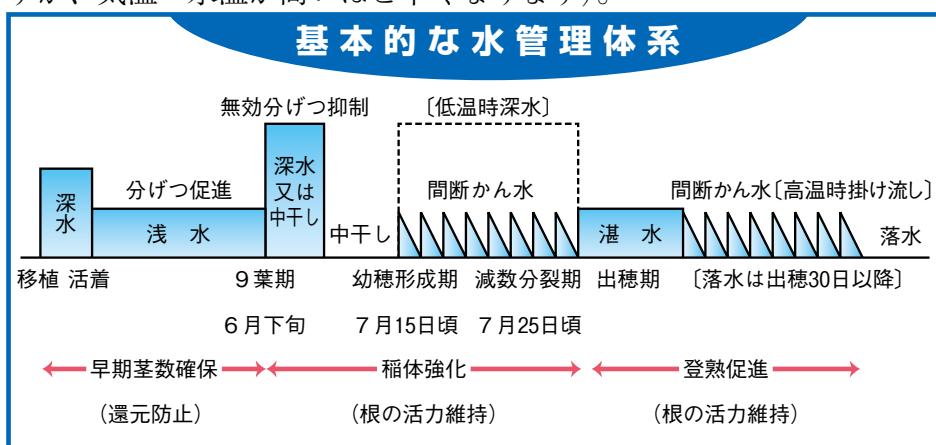
1 田植え作業とその後の管理

①田植えから活着まで

- 田植え作業は、日平均気温14℃以上（中苗）、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。最高気温15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。平均14℃以上となるのは、平年であれば5月17日以降（アメダス能代平年値より）です。
- 植え付け本数は4本／株程度とし、3cm以上の深植えにならないようにします。
- 田植え直後は活着を促進させるため、水深4cm程度の湛水状態として保温に努めましょう（苗の活着には4～5日かかりますが、気温・水温が高いほど早くになります）。

②分けつを促進させる水管理

- 高品質・良食味米の生産技術として強勢分けつの確保が重要です。分けつは、日平均水温23～25℃、日気温較差が大きい場合に発生が促進されます。
- 「早朝かん水・日中止水」を基本に、気温が15℃以上の場合は浅水管理、15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。



③雑草防除

平成29年産米の落等要因の大部分は、斑点米カメムシ類被害によるものでした。県内の主要加害種であるアカスジカスミカメは、カヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し増殖するため、水田内雑草の防除を徹底しましょう。

- 発生草種および雑草の量に応じた薬剤の選択と適切な使用により、効果的な雑草防除を行いましょう。
- 除草効果を高めるため、一発処理除草剤は「代かき日から10日以内」に使用します。代かき～移植までに10日以上かかる場合は、移植後の初期除草剤と一発処理剤の体系処理を検討してください。
- 除草剤散布時の水深は、粒剤では3～5cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等では5～7cmとし、薬剤が拡散しやすいうようにします。
- 除草剤散布後7日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりと入水します。
- 水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前の初期剤の使用は極力避けてください。やむを得ず移植前に使用する場合、使用時期は移植7日前までとなります。

2 いもち病防除

本田の葉いもちを防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。以下の点に注意して葉いもちの発生を予防してください。

①薬剤による葉いもち防除

- 本田葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施します。（育苗期いもち防除剤として使用したベンレート水和剤やビームゾルは、本田まで防除効果は持続しません）

②耕種的防除

- 育苗中に葉いもちが確認されたハウスの苗は移植しません。
- ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になるため、補植終了後は水田の泥の中に埋めるなどして、完全に処分してください。
- 乾燥状態で越冬した稻わら・穀殻は、葉いもちの伝染源となるので、ほ場周辺に放置しないでください。なお、敷きわらを使用した野菜ほ場の周辺では、葉いもちの早期発生に注意してください。

来月のあなたの運勢（2018年6月）



牡羊座 (3・21~4・19) 知識欲が旺盛になっている月なので、引かれることがあったら、情報収集を。耳寄りな話題をゲットできるかも

2018.5月号

しらかみ